

# まきえきくじどうずやくるうばこ 蒔絵菊慈童図薬籠箱

種 別 有形文化財（工艺品）

員 数 1基

所在地 金沢市出羽町2番1号  
石川県立美術館

所有者 石川県

## 概 要

本品の作者は、初代五十嵐道甫<sup>どうほ</sup>と伝えられている。五十嵐家は、室町時代以来の蒔絵の名家であり、初代道甫は京都に住して蒔絵の業を営み、加賀藩主前田家の御用に依じて、時折金沢に赴き、加賀蒔絵の基礎を築いた人物である。

本品は、弘化3年（1846）の『前田家表御納戸道具目録帳』<sup>まえだけおもておなんどうぐもくろくちょう</sup>に記載されており、加賀藩主前田家に伝来したものである。

長方形の蓋を開けると、中に二段の抽斗<sup>ひきだし</sup>があり、各々に六個の薬入れが納まる。蓋表は、稻妻状に画面を二分割し、一方に山水に菊慈童の図、他方に鶴の丸文<sup>まるもん</sup>を散らし、地文様を花菱の七宝繫文<sup>しっぽうつなぎもん</sup>で埋める。

菊慈童の物語は、周の穆王<sup>ぼくおう</sup>の寵愛を得たため、他人の嫉妬をうけ流罪にされ、そこで法華経を唱え、菊の葉に書き留めると、その葉から落ちる露で谷川の水は不老不死の薬となり、慈童は永遠に少年の姿のままであったというもので、まさに薬箱にふさわしいテーマといえる。

箱の各面や抽斗には、菊に山水図が全面に表現されており、金高蒔絵<sup>きんたかまきえ</sup>や切金<sup>きりかね</sup>の技法が駆使されている。また、要所に打たれている扇形の金具には、加賀象嵌の初期の技法が、見事に表現されており、まさに大名調度にふさわしい豪華な作品である。

このため、その文化財的価値は高く、有形文化財に指定し、その保存を図ることが必要である。

